
とある模造の失敗作

夏越

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある模造の失敗作

【Nコード】

N2576BA

【作者名】

夏越

【あらすじ】

不完全になれなかつた模造品で失敗作な少年、球磨川 楔。
不完全へとなるために失敗作が学園都市に牙を向く。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

よろしくお願いします。

プロローグ

「あーあ『ビックリだよなー』」

黒髪の少年は欠伸をしながら暇そうに呟いた。
彼の名前は球磨川 楔。

不完全に成れなかった模造品で失敗作である。

「本当に世界って何が起こるか分かんないよね」
『あの僕の兄貴が
オリジナルが
めだかちゃんと和解しちゃったし』

懐かしむような嬉しそうな顔をして空を仰ぐ。

「まあ『

「不完全に成れなかった欠陥だらけの僕だったら確実に改心なんてできるはず無いんだけどね」

不機嫌そうな、まるでおもちゃを失った子供のような顔になる楔。

「だけど」^{オリジナル}「兄貴が不完全で無くなった今」「僕が世界一不完全に近いモノって言うって良いのかな？」

空から自分の前方に視点をあわせる。

「だって僕は」

「今まで一度たりとも幸せとか勝利とか友情とかプラスなものを味わった事無く求める事無く」『全て諦めて生きてきたんだから」

全てを諦めた口ぶりで不機嫌そうに呟いた。

「そう」『僕は過負荷としても失敗作なんだよなあ」

楔は静かに歩き出した。

向かうは学園都市。

自身がもっと不幸にもっと不完全に近づくために。

「模造品は模造品らしく兄貴オリジナルの真似事でもするかなあ？」『エリー
ト抹殺とか？」

「まあ無理だろうけど」

こうしているはずの無い失敗作イレギュラーを交えて物語りは無常にも始まるの
だった。

第一話（前書き）

第一話

「ん?」『ここ何処?」

楔は気が付くと教室に居た。
何の変哲も無い平凡な教室。

「やあ、元気かい? 楔君」

楔の真後ろに彼女は現れた。

「……………」『久しぶりだね安心院さん」

平等なだけの人外。

ノットイコール
悪平等の安心院なじみ。

少なからず過去に因縁のある楔は一瞬無表情になるが、オリジナル兄譲りの笑
みを浮かべて口を開いた。

「どうだい? 学園都市は。今日は引越しに身体検査システムスキャンもあつたんだろ」

「勿論、レベル0だったぜ」 『僕みたいな欠点だらけの奴が能力者になれるわけ無いだろ』

「まあ、当たり前前の結果だね。それより今日は、世間話をしに来たんじゃないんだ」

真剣な表情をする安心院。

そんな彼女に楔はおどけた。

「何の話だい？」 『僕は兄貴とめだかちゃんが付き合った位のインパクトのある情報じゃなきゃ驚かないぜ』

急に安心院が楔に深々と頭を下げてきた。

「まずは君に謝っておきたいんだ。それが学園都市に君を送ってしまった僕の責任だ」

「君が謝るほどの大事態でも起きたのかい？」

安心院は頭を上げると楔に話し始めた。

「学園都市に異常性、過負荷…つまりはスキルの存在がばれたちゃ

「ったんだよ」

その言葉に首を捻る楔。

「それがどうかしたのかい？」『スキルの存在ってもともと学園都市の人間は知っているものかと思っていただけだ』

楔の質問にため息をつく安心院。

「君は学園都市の能力者がどうやって能力を使用するか知っているのかい？自分だけの現実土台として演算をしながら発動するんだぜ？そんな能力と似たようなスキルが演算も何も無しで使える。リスクも無しだよ。そんなことを学園都市総括理事会が知ったら、スキル持ちは全員実験台にされちゃうぜ」

「それじゃあスキルを持つ僕も……」

「残念ながら君の居るところは学園都市、敵の総本山さ。まあ、命を狙われるのが日常だと思ってくれたまえ」

楔が安心院の発言により、少し笑顔を崩したのは仕方がないだろう。

「それじゃあ兄貴達も危ないんじゃないのかい？」
オリジナル

「君以外のスキル持ちは世界中の悪平等が保護しているからね問題ないさ。この学園にも何人が悪平等がいるから何かあったときはサポートさせよう」

安心院は言葉を止めて一瞬宙を見つめると、楔に笑いかけた。

「おや、早速襲撃してきたみたいだね。精々ががんばって生き残ってくれよ」

「ええ〜…」

次の瞬間、楔の意識は沈んでいった。

第二話

楔が目を覚ます3分前に遡る。

楔が新しく引つ越してきたアパートの目の前に一人の少年が立っていた。

「ここか…」

茶髪に整った顔立ちをしたホスト風の男。

学園都市に7人しかいないレベル5であり、序列第二位。

「ダークマター未元物質」垣根帝督である。

彼は学園都市総括理事会直々に依頼された任務を遂行しようとしていた。

昨日から学園都市にやってきたレベル0の捕獲。

無傷で連れて来るようにと言われている。

本来ならスクールのリーダーである帝督自ら出てくるような依頼ではない。

しかし、総括理事会からの情報によるとターゲットは超能力とは違う謎の力を使ってくる可能性があるらしい。

相手の力が未知数ということもあり、帝督自らが出る羽目となったのだった。

「さっさと終わらせて帰るか…」

帝督は自身の能力を発動し、六枚の羽を出現させた。
そしてそのまま、楔が居るはずの部屋まで飛び立っていった。

そして時は楔が目を覚ました時に戻る。

「ふあ……」『寝た気がしないや……』

欠伸をしながらソファーから起き上がる。

まだ眠いが、安心院の言う襲撃者に備えて立ち上がろうとした。

次の瞬間、ベランダに面する窓が派手な音を立てて割れた。

楔が振り向くとそこには長身茶髪の男性が立っている。

垣根帝督である。

突然の侵入者に対して楔はすぐさま距離をとって逃げる姿勢を見せた。

「君……」『不法侵入は犯罪だぜ?』

「問題ない。ジャツジメント アンチスキル風紀委員も警備員も来ないから安心しろ」

「うーん…」 『それってピンチ?』

襲撃者が一人とは限らないので迂闊に動けない。

しかし、こんな狭い部屋で明らかに能力者である帝督と戦えばアパート崩壊の危機だ。

「君は僕のこと捕まえに来たんだろ?」

「知ってるのか。それじゃあ大人しく捕まれ」

「ははっ!」 『自ら実験台になる趣味は無いんでね!』

楔は話終えると同時に、自分の真後ろにある窓を開けてそこから飛び出した。

「じゃーねー」

「!?!」

生身の人間が4階の窓から飛び出すなど正気沙汰ではない。

無傷でつれて来いと言われていた帝督は、慌てて窓から身を乗り出して下を見た。

しかし、帝督の心配も杞憂に終わった。

真下では何故か無傷で手を振る楔の姿が見えたのだ。

追いかけようと窓枠に手を掛ける帝督だが、楔は直ぐに路地裏へと消えていった。

「危ない危ない」『あのスキルが無かったら僕は逃げることさえ出来なかっただろうね』

すぐさま路地裏に入ってしまった楔だが、何しろ昨日引越してきたばかりの土地だ。
どこをどう行ったら良いのかまったく分からない状態である。

闇雲に路地裏を駆け抜けていくが、暫くすると真後ろから声が上がった。

「見つけたぞ！」

「おっと」

結構早く見つけたな。

そう思い楔が後ろを向くと、そこには白い翼によって宙に浮く帝督がいたのだ。

本能的に危険を察知して一歩後ろに下がる楔。

「ええ…何その能力…？」 「メルヘンな格好してるね」

冷や汗をかきながら冗談を言う楔に、帝督はニヤリと笑い言い放った。

「心配するな。自覚はある」

「序列第二位」垣根帝督 対「失敗作」球磨川楔。

学園都市のとある路地裏にて戦いは始まった。

第二話（後書き）

いきなり主人公大ピンチ！

次回、主人公のスキルが明らかに…なるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2576ba/>

とある模造の失敗作

2012年1月8日18時50分発行